

高等学校地理歴史科・公民科における評価の在り方に関する研究

細かな要素的知識を覚えさせる授業やテストの在り方を見直し、多様な学力、実質的な学力を育成するための指導と評価の在り方について研究した。具体的には、諸外国での指導と評価の現状についての文献調査、県内教員への指導と評価に関するアンケート調査を踏まえて、研究協力員とともに、指導と評価の実践を行い、結果を分析した。成果として、「評価の4観点」を組み入れた授業実践や評価活動、論述考査問題を行うことにより、資料活用能力、思考・判断力、表現力など多様な学力を伸ばすとともに、生徒の学習意欲を高めることができた。また、評価に対する教員の考え方も変わり、評価活動を授業改善にも活用できた。

キーワード 地理歴史科 公民科 評価 テスト 学力 思考力 学習意欲

【研究協議会委員】

県立熱田高等学校教諭	岡村 直人	県立高蔵寺高等学校教諭	登地 宏光
県立旭野高等学校教諭	藤中 政浩	県立岡崎北高等学校教諭	伊豫田政準
県立幸田高等学校教諭	萩生 昭徳	県立安城南高等学校教諭	村瀬 正幸
研究指導主事	大橋 貴資	研究指導主事	磯谷 正行

1 はじめに

従来、地理歴史科・公民科においては、細かな要素的知識を正確に覚えている生徒を「できる生徒」「学力が高い生徒」と評価しがちであった。内容教科である地理歴史科・公民科では、この要素的知識は外せないが、これをたくさんもっているだけでは「学力が高い」ことにはならないであろう。教科での学習と現実生活のつながりに気付き、要素的知識を意味づけたり関連付けたりして構造化し自分なりの認識に達することも学力であり、さらに学習の結果、地理や歴史・現代社会の様子に興味をもち、将来も学び続けたいと思うようになることも重要な学力である。こうした多様で実質的な学力が育つよう指導方法や評価方法を改善していく必要がある。

2 研究の目的

高等学校地理歴史科・公民科における学習指導及び評価の在り方を見直し、「評価の4観点」に示される多様な学力、実質的な学力を育成するために効果的な指導と評価の在り方を探る。

3 研究の方法

- (1) 地理歴史科・公民科的教科の評価問題について、世界の現状・動向を調査し、日本の授業やテスト問題の作成の参考となる点を析出する。
- (2) 県立高等学校の地理歴史科・公民科の教員に対し、「授業や評価に関するアンケート」を実施し、地理歴史科・公民科の指導や評価の在り方について実態を調査する。
- (3) 各科目において「評価の4観点」や「指導と評価の一体化」を踏まえた指導計画、授業、評価を実践し、成果や課題を分析する。

4 研究の内容

(1) 世界における地理歴史科・公民科的教科のテスト問題の分析（参考資料1）

ヨーロッパ・アメリカなど世界各地の大学での共通入学資格とされているインターナショナルバカロレアの試験問題、イギリスのGCSE試験（義務教育修了試験）、韓国の「遂行評価」などについて調査した。参考になる点として、欧米では、調べる、考える、書いたり口頭で発表したりするなど主体的な学習過程が授業に取り入れられ、テスト問題も、資料活用能力、思考力、推論能力、表現力を試すための論述式試験が中心であることである。また、論述試験用の採点基準があり、採点するための教員研修も行われている。隣国の韓国でも、学習者の思考・考察過程を評価する多様な評価方法を導入し、論述型の評価問題と数値化による客観性の保障という課題に取り組んでいる。

(2) 地理歴史科・公民科教員に対する授業や評価の在り方に関する調査（参考資料2）

県内の地理歴史科・公民科教員に対して、平成14年9月に調査を行い、245名の教員から回答を得た。その結果の一部を以下に示す。

授業の形態では、「講義を中心に進めている」とするものが47.3%で、「講義に加え、資料を読ませたり、実物教材を利用している」とするものが44.9%、「主題学習や課題追究学習をなるべく取り入れている」とするものが7.8%であった。公民科教員に比べ、地理歴史科の教員は、「講義を中心に進めている」が14.9%、「講義中心でいいと思う」では6.2%高かった。普通科の教員には、「受験のことを考えると課題追究学習に取り組みさせる余裕がない」とする自由記述が多かった。

定期考査は、「一問一答的な問題を中心に出題している」とするものが45.3%、「資料や図表を取り入れている」とするものが44.5%、「論述問題も出題している」は10.2%であった。「一問一答的な問題」は専門学科や定時制で、「論述問題」は公民科で多く出題されている。

評定については、「テストの点のみで評定を出す」とするものが20.8%、「ノートや小テストなどを加味して評定を出す」とするものが70.6%、「発表学習やレポートを加味する」とするものが8.6%であった。また、「評定に平常点を入れた方がよい」とするものが84.1%であった。

全体として、地理歴史科は、「大学入試」を理由に講義形式の授業が多く、公民科の各科目や専門学科・定時制においては多様な授業形態や評価方法がとられる傾向にある。

(3) 「評価の4観点」を踏まえた指導と評価についての実践

平成12年12月には教育課程審議会から「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」とする答申が出され、平成13年4月には「指導要録の改善等について」の通知が出された。ここでは、次のような指摘があった。

学力を、知識の量、基礎的・基本的な内容の習得だけでなく、自ら学び自ら考える力などの生きる力がはぐくまれているかどうかによってとらえる。

評定に当たっては、ペーパーテスト等による知識や理解のみの評価など一部の観点到に偏した評定が行われることのないように、関心・意欲・態度 思考・判断 技能・表現 知識・理解の4つの観点による評価を十分踏まえる。

生徒の良い点や可能性を評価（個人内評価）するとともに、評価活動を生徒の学習や教師の指導の振り返りの機会とする。

本研究では、上記の分析、調査、指摘を踏まえ、各科目において、単元を設定し、「評価の4観点」を取り入れた指導目標、評価目標を設定し、授業を行い、各観点到に基づく学力がどの程度生徒に身に付いたかを評価する、という実践を行った。

4 各科目における実践

(1) 資料の読み取りを重視した授業と定期考査の実践(世界史) (参考資料3)

ア 実践の概要

本研究では、「評価の4観点」の中で特に「思考・判断」、「資料活用の技能・表現」を重視した授業と定期考査を実施することで、歴史的思考力を育成する実践を行った。まず、授業では文字資料や図版資料を用い、資料の読み取りや資料の解釈を行い、資料活用の技能・表現や思考力・判断力を培った。次に、定期考査では、授業とは異なる資料を使用して作成した問題を出題し、授業で培った学力が身に付いているかを評価した。考査問題は論述問題とし、使用する資料は、文字資料だけではなく、統計資料や絵画・写真資料など様々なタイプの資料を使用した。最後に、論述問題の採点の客観性を高めることについても研究した。

イ 成果と課題

今回の研究の目的は、「評価の4観点」を踏まえ、資料活用能力を重視した授業及び定期考査の実践を行い、歴史的思考力を育成することであった。生徒のアンケート結果から、約6割の生徒がこの実践に「意味がある」「どちらかといえば意味がある」と回答している。その理由として、「このような問題を解くことでその時代の背景がよく分かるようになるから」「資料を読み取るという作業をすることで、単に覚える世界史から考える世界史になり、考えることでより理解を深めることができるから」などが挙げられていた。研究の成果としては、生徒が資料を基に思考し判断する授業や考査を行うことにより、生徒の歴史的思考力を培うことができたことである。今後の課題としては、資料から情報を読み取るだけでなく、資料の信憑性を吟味するなど資料批判を生徒にさせること、また、論述問題の採点の客観性をより高めることである。

(2) 評価規準を使った学習活動の評価と授業を生かした定期考査の実践(日本史) (参考資料4)

ア 実践の概要

今回の研究は、予め準備した評価規準を使って、生徒の学習活動の評価を試みである。具体的には、近世の鎖国政策とその歴史的意義を生徒個々に追究させ、その成果を評価規準に則って評価した。なお、授業では学習プリントを利用したが、その作成に当たっては以下の点に留意した。

調べた内容を記入させるほかに、毎時間の課題を設定し、まとめや論述に取り組みさせる。

追究させる課題は、歴史の学び方や調べ方を身に付けさせ、歴史の見方をはぐくむものとする。

また、授業の中で生徒全員の学習活動の評価することは難しいので、生徒が授業中に取り組んだ学習プリントを利用し、以下の点に留意して授業後に評価を行った。

評価の対象は、生徒が調べて記入した内容、課題に対するまとめや論述とする。

評価規準は「評価の4観点」に基づいて作成し、学習成果に応じた3段階の基準を準備する。

評価は、生徒の事後指導に利用するとともに、点数化して学期末の成績に組み入れる。

さらに定期考査でも、授業中にはぐくんだ力を総合的に活用させて解く問題も出題し、評価することを試みた。具体的には、生徒が授業中に身に付けた資料読みとり能力や判断力、表現力などを問う論述問題を出題し、採点基準(配点)についても、**関心・意欲 知識・理解 思考・判断 技能・表現**の観点を設け、これに基づいて点数をつけた。

イ 成果と課題

以上の結果、作業を入れた問題解決的授業が生徒の興味や関心を喚起し、学習意欲を高めることが改めて明らかになった。また、授業中の作業や学習成果への教師の評価が、授業への積極的な取組を

促すことも分かった。さらに、授業や定期考査で論述問題に取り組みさせることが、生徒の歴史に対する認識を深めるだけでなく、表現力や資料活用の技能などを向上させた。

一方、生徒が論述した文章を評価する際、評価規準を当てはめにくい事例もあった。また、教師が評価規準を意識しすぎて指導すると、生徒のまとめや論述が画一化してしまう傾向もみられた。しかし、知識の再生能力のみを評価するだけでは、多面的・多角的に考察し、多様な表現のできる生徒の育成は難しい。上記の問題点を解決しながら、授業と評価の改善に取り組んでいきたい。

(3) 資料活用の技能・表現力、思考・判断力を高める実践と評価(地理) (参考資料5)

ア 実践の概要

今回の実践では、資料活用の技能・表現力、思考・判断力を育成することを重視し、「現代世界の系統地理的考察」の中の単元「プレート運動と大地形の形成」と、「現代世界の地誌的考察」の中の単元「アメリカ合衆国」に関する授業を行い、評価の在り方についても検討した。

なお、教材化及び実践に当たっては、次の事柄に配慮した。

家庭学習としての課題及び授業中の学習として、白地図への書き込みなどの作業的学習の場面を多く設けることにより資料活用の技能・表現力の育成を図った。

また、生徒自ら作成した分布図などの資料から読み取れることを発表させたり、学んだことを応用して推測させたりして、思考・判断力を育成する工夫を取り入れた。

評価の対象として、考査問題だけでなく、授業プリントへの記入内容も含めた。

考査問題は、授業で生徒が理解した事柄を応用することで解ける問題も含めた。すなわち単に用語を問うのではなく、地理的な法則性を応用した思考・判断力を確かめたり、資料活用能力を確かめたりすることができる問題とした。そのために考査問題には論述問題も含めた。

イ 成果と課題

今回の実践は、日頃の授業と比べてやや作業的学習の内容が多いほかは、特別な方法を取り入れたわけではなく、講義形式の部分も多い。しかし、白地図や授業プリントに書き込みながらの学習のためか、生徒も意欲的に取り組み、授業後の感想でも高い自己評価を行っている。また、授業プリントを評価の対象とすることにより生徒の学習過程の評価が可能となり、単に定期考査での知識・理解だけの評価に偏らない、バランスのとれた評価を行うことができた。特に論述問題は、生徒の思考・判断力やそれを支える知識・理解の程度を確認するのに有効であった。今後は、論述問題の作問の方法について更に工夫を加えていきたい。

(4) 問題意識を高め、知識を再構築させる授業の実践と評価(政治・経済) (参考資料6)

ア 実践の概要

政治・経済の授業において、現代社会の諸問題を追究させていく場合、多面的・多角的な考察は不可欠である。今回の実践では、授業の中で生徒に思考を促し、それを文章化させて評価していくとともに、テストにおいては授業で培われた思考力や資料活用能力を問う論述問題を出題した。

まず、授業では問題意識を持たせることを重視し、中学校社会科で獲得した知識を拡張したり体系化させたりしながら現実の諸問題との原因や関連を考えさせた。生徒の問題意識を高めるための一つの方法として、アンチテーゼを提示することで生徒の常識的な理解に揺さぶりをかけ、生徒に知識を再構築させる方法があり、この方法により思考力や判断力を育成しようとした。また、授業の終わりに生徒自らの意見をノートに書かせることにより、漠然とした考えや疑問を明確化させ、ノートを回

収して評価に加えるとともに、生徒の理解度や疑問点を把握し、学習指導の参考とした。

テストにおいては、「人権と義務」の授業の中で思考したことや得られた知識をもとに、具体的な社会問題を考察する論述問題を出題した。

イ 成果と課題

生徒のノートに書かれた意見を見ることで、生徒の思考内容、理解度、疑問点が理解でき、授業の反省や個別指導の参考になった。またノート点検結果を評価に加えることにより、生徒の学習意欲を高めることができた。論述問題については、考えた事柄や学んだ知識を自分の言葉で表現しようという姿勢がみられた。また生徒へのアンケートでは、「論述問題は難しいが、大切なもの」と答えた生徒もあり、肯定的な生徒が多かった。

しかし、生徒個々の意見をクラスにフィードバックし、全体で共有化していくことについては不十分であった。また、限られたテスト時間の中で、論述問題を含めどのような評価問題を作成していくのかについての理論化の必要を感じた。論述問題についても、作問の能力や採点者の採点能力を高めることの必要性を感じた。

(5) 「目標・指導と評価の一体化」を目指した授業と評価（倫理）（参考資料7）

ア 学習内容構成上の工夫

先哲の思想理解を中心とする倫理の学習が生徒に分かりやすく、かつ、意味あるものとされるために、2つの工夫を行った。第1に、先哲の思想を、先哲の抱いた問題意識、その問題を解決しようとして考えた思想、先哲が実際に行った行為という3つの要素により説明した（目的論的説明）。これにより、先哲の思想内容の理解が時間と空間を超えた現在の課題について思索する手掛かりとなった。第2に、生徒に思索を促すために、自分自身の経験に照らして先哲の思想の妥当性を判断させたり、自分自身の生き方を省みさせたりする場面を設けた。これにより、生徒一人一人に対していかに生き、いかなる人間になったらいいのかという自覚をもたせ、思索を深めることができた。

イ 評価問題作成上の工夫

第1に、学習指導案に明確化された評価項目（「評価の4観点」）と定期考査における一つ一つの評価問題とを対応させた。これにより、生徒が授業を通じて何を習得し何を習得できなかったか明らかになり、また、授業者が何を習得させることができたか、あるいはできなかったかが明らかになった。

第2に、授業の中で生徒に行かせた思考や思索を追体験させる評価問題を作成することにより、授業中の思考や思索を評価しようとした。この評価問題は、先哲の問題意識、思考の過程、思考の結果を論述させる形式の問題が中心となる。これにより、授業中に確実に思考と思索がなされたか、思考や思考の前提となる知識や思考の結果得られた理解が身に付いているか、さらに適切な表現力があるかについても評価できた。

ウ 論述問題の採点の客観性について

	第3問	第4問	第6問	第8問
得点差0	20名(50%)	30名(75%)	28名(70%)	25名(62.5%)
得点差2	16名(40%)	10名(25%)	12名(30%)	14名(35%)
得点差4	4名(10%)	0名	0名	1名(2.5%)
得点差6	0名	0名	0名	0名
得点差8	0名			

2名の教員により、同一の生徒の論述問題の解答を採点し、得点結果を比較することで、教員の論述問題に対する採点の能力や客観性について調査した。

4点以上の差が出た答案については、採点者相互で見直し、得点修正を行った。

(6) ポートフォリオにより個性的な学びを評価する (参考資料8)

ア 実践の概要

「評価の4観点」に基づく授業実践との関わりで、近年総合的な学習の時間の評価に有効とされるポートフォリオ評価を地理歴史科・公民科の学習に応用し、生徒の個性的な学習を評価し、学習意欲を高める実践を行った。ポートフォリオとは、学習のプロセスで派生するメモ、新聞・雑誌の切り抜き、本の要旨、インタビュー記録、自己評価記録などをファイリングしたものをさす。

今回は、生徒が歴史的事実や概念を授業を通じてどのようにその生徒なりの知識・理解として習得したかを評価するために、3つのポートフォリオを作成させた。

授業記録・授業感想表(「記録ポートフォリオ」)

これは、生徒が毎時間の授業から学び取ったことを自由に記録するもので、生徒の学びの質・関心領域や価値観をつかむことができる。これを日々の授業・指導計画の修正を行うために利用した。

自由論述型考查問題(「評価ポートフォリオ」)

これは、生徒が歴史的事実や概念を自分自身の問題としてどのように受け止めているか、それにどのような意味を与えているかを評価するもので、生徒の個性的な学びの質を学期ごとに評価するために作成した。

夏季休業課題(「秀作ポートフォリオ」)

これは、プレゼンテーション用のポートフォリオである。今回は、夏季休業課題として「海外旅行ガイドブック」の作成を行い、文化祭の際に優秀作品を廊下に掲示し、評価した。

イ 成果と課題

今回の取組の成果として、生徒の学びに対する質や関心領域、生徒の価値体系を授業者側がつかむことができ、以後の指導計画・内容・方法の改善につながったこと、知識再生型テストでは能力を発揮できず、自信をもてなかった生徒に対して、新たな側面から光を当てて評価することが可能になったこと、生徒の学力がどの程度進歩したかを判断する個人内評価が可能となり、生徒の歴史認識の変容をつかむことができたこと、が挙げられる。今後は、ポートフォリオ評価を、生徒が自分自身の学びの過程を把握し、それを深めるための情報として活用することの有効性についても追究したい。

5 研究のまとめ

各科目による実践の結果、以下のような成果を得た。

- (1) 「評価の4観点」を組み入れた指導案・評価案に基づき、授業を実践することで、資料活用能力、思考・判断力など多様な学力を伸ばすとともに、生徒の学習意欲を高めることができた。
- (2) 論述考查問題の複数教員による採点は、明確な採点基準を設けておけば、採点者による点数の差は許容範囲の誤差となる。論述テストは、生徒の思考力や表現力を育てるために有効であると同時に、それを採点することで教師の力量向上にもつながる。
- (3) 評価を評定を出す(学力を測定する)ためだけのものと考えのではなく、生徒の個性的で多様な学力の成長の様子を見取るものでもあると考えることにより、生徒と教員のかかわり方が変わると同時に、評価を授業者の授業改善にも活用できる。
- (4) 指導案を作成する段階から、学習過程での評価や学習後の評価(テスト問題)の内容・方法について計画しておくことは有効であり、かつ重要である。

今後は、教員一人一人が、「評価の4観点」を踏まえた指導計画・評価計画を作成することに習熟するとともに、多様な学力を適切に評価するための能力を高めていくことが課題となる。

参考資料

- 参考資料 1 世界の地理歴史科・公民科的教科のテスト問題の分析
- 参考資料 2 県内地理歴史科・公民科教員へのアンケート集約
- 参考資料 3 資料の読み取りを重視した授業と定期考査の実践（世界史）
- 参考資料 4 評価規準を使った学習活動の評価と、授業を活かした定期考査の実践（日本史）
- 参考資料 5 資料活用の技能・表現力、思考・判断力を高める実践と評価（地理）
- 参考資料 6 問題意識を高め、知識を再構築させる授業実践と評価（政治・経済）
- 参考資料 7 「目標・指導と評価の一体化」を目指した指導と評価（倫理）
- 参考資料 8 ポートフォリオで多様な学びを評価する - 学習支援と授業改善のための評価活動 -